

旦那様、離婚してくださいませ！

目次

番外編	271
残念公爵と悪役令嬢の恋	
旦那様、離婚してくださいませ！	7



キリアン・
シュバリエ

ローズの夫で、王太子の側近。
妻であるローズよりも優先する
存在がいるようだが――？



ディミトリ・
フォーレ

隣国グランデの強かな外交官。
亡き妻の思い出を大事に
しているようだが――？



イヴォンヌ・
ベルトラン

隣国グランデに嫁いだものの
夫を亡くしたことをきっかけに
自国に戻ってきた王女。
ローズを姉のように慕っている。



ジョルジュ・
ベルトラン

ベルトラン国の第二王子。
ローズとキリアンの結婚に
大きくかかわっている
ようだが――？

登場人物紹介



ローズ・
シュバリエ

とある事件をきっかけに
シュバリエ公爵家に
嫁いだ元子爵令嬢。
夫であるキリアンとは
白い結婚が続いていた。

旦那様、離婚してくださいませ！

「奥様、大変です！ 旦那様が事故に遭われたそうです！」

私——ローズ・シュバリエが穏やかな日差しが差し込むテラスで朝食を食べていると、普段は公爵家の使用人らしく落ち着いた態度を崩さない執事のアダンが駆け込んできた。

夫のキリアンが急な仕事で屋敷を発ったのは、昨日の夜のこと。

本当なら、三年目の結婚記念日を祝う、特別な夜になるはずだった。

だが、お仕えしている第二王子殿下の命とあつては断ることもできない。せっかく準備した晩餐^{ばんさん}に手を付けることなく、彼は出かけてしまった。

本当は、大切な話もあったのだ。なんてタイミングが悪いのだろう、とため息が漏れた。

でも、仕事なら仕方がないとぐっと我慢し、『絶対に早く帰ってきてくださいね』と笑顔で送り出した。すると、いつもはあまり表情の変わらない旦那様が『わかった、早く帰るようにする』とやわらかく微笑んでくれたのだ。

珍しいこともあるものだと思いたけど、結局、いつもの通り夜になっても彼は戻ることはなかった。きつと、王子宮に与えられている部屋に泊まっているのだろうと思っていたのに。

「酷い怪我なの？」

「詳細は不明ですが、右足を骨折されたようです」

「そう。無事……とは言えないでしょうけど、ひとまず命に別状はなさそうですね」

わざわざ第二王子殿下が早馬^{はやうま}をよこしてくださったのだから。

よほどの大怪我なのかと心配してしまった。

「ただ、念のため一日様子を見て、異常がなければ明日にはこちらに戻って来られるとのことでした」

そうね。時間がたつてから症状が出ることもあると聞くもの。そのほうが安心だね。

「わかりました。では、しばらく階段の移動は無理でしょうから、一階の客間を使ってもらった方がいいわね。今日中にリネン類の交換と、衣類などの日用品の移動をお願いできるかしら」

「かしこまりました」

あとは何がいるかしら。ああ、車椅子^{くるまいす}の手配もしなくては。他には——

あれこれ考えを巡らせていると、急に黙り込んだせいで私が不安がっていると思ったのだろう。

アダンが優しく微笑みながら声をかけてくれた。

「早く、お元気な姿を見せていただきたいですね」

見当違いな心配に苦笑しつつも、その気遣いが少し嬉しかった。

「……そうね。早く会いたいわ」

旦那様と結婚して三年。慣れないことばかりだったけれど、こうしてシュバリエ公爵家の一員と

して、周囲からも大切にしてもらえようになったことが誇らしい。

それにしても、昨日の記念日は私たちにとって大切な節目になるはずだったのだ。

だから本当に心待ちにしていたのに、急に外泊になって、さらには事故にまで遭うなんて、一体何があつたのだろう。

でも、第二王子殿下直々の報せとあつては、これ以上の詮索^{せんさく}をすることもできず、どうか早く帰ってきてくれますようにと祈るしかなかった。

しかし、旦那様が戻ってきたのは、予定より三日も過ぎてからのこと。

怪我が悪化したというわけではなく、馬車の振動が怪我に響くからという配慮^{はいりょ}だったようだが、待っている私たちの身にもなつてほしい。

本当に、そろそろ殿下に文句の一つくらい言いたい気分だった。

それでも、やっと帰ってきてくださったのだ。

笑顔でお出迎えしなければと、両手で自分の頬をもみほぐした。

「おかえりなさいませ、旦那様」

久しぶりに目にする旦那様の姿に、自然と笑みがこぼれた。

——だが。なぜか彼は私を見た瞬間、ひどく驚いた表情のまま固まつてしまったのだ。

「あの……旦那様？ どうされました？」

なに？ 私の顔に何かついていたらかしら？

——いえ、まさかと内心焦つてしまう。

そんな私を凝視^{じょうし}したまま、旦那様はかすれた声を漏らしたのだ。

「……あなたが私の妻なのか？ まさか本当に結婚しているなんて……」

「は？」

え、まさかつて何？ あなたが私の妻かつて、それこそまさか——

「奥様、お伝えするのが遅くなり申し訳ありません！」

旦那様の秘書を務めるルイが、旦那様をかばうように前に出てきた。そして。

「旦那様は右足の骨折以外にも頭を負傷されました。そのショックで……五年分、十九歳以降の記憶を失っておられるのです」

「……記憶喪失？」

それこそまさか、本当になる人がいるなんて。てっきり小説でしか使われない病名だと思つていたわ。

「はい。いつ記憶が戻るかは、医師にもわからないそうです」

……そうよね、確かに物語の中でも、お医者様がそう説明していたわ。

と、どこか他人事のように、ぼんやり考える。あまりの現実味のなさに、私の口からは、「はあ、そうですか」という、間の抜けた返事しか出てこなかった。

「すぐかもしれないですし、一生戻らないかもしれないと……。で、ですが！ 奥様がいらつしやれば、きつとすぐに思い出されますよ！」

無理に明るく振る舞つて励ましてくれるルイの姿が、かえつて痛々しい。きつとこの三日間、旦那

那様の記憶を取り戻そうと、彼も必死に頑張っていたのだろう。

だめね。私が呆けている場合ではないわ。すっかりなくては。

「……わかりました。記憶喪失と右足の骨折。他にお怪我はありませんか？」

改めて旦那様に視線を向けると、彼もまた、私をじっと見つめていた。その不審そうな眼差しは、確かに旦那様であって旦那様ではないのだとわかる。

五年分の記憶がないということは、彼の頭から私の存在は完全に消えているのでしょうか。

——だって、私たちが初めて出会ったのは、ちょうど五年前の『あの事件』のあとなのだから。

「はい。ただ、出血を伴う外傷はありませんが、頭部にこぶができています。あとは肩や背中が打撲が」

「わかりました。……あ、ごめんなさい。お怪我をなさっているのに、こんなところで立ち話をさせてしまつて。旦那様は覚えていらつしやらないようなので、まずは自己紹介から。私は三年前に嫁いでまいりました、ローズと申します。婚約したのがちょうど五年前ですので、初めましてとなるのかしら」

旦那様に向かい、恭しくカーテシーをした。

でも、旦那様は何と返していいのかわからないのか、少し困つたような表情で黙り込んだままだ。仕方がないわね。見ず知らずの女が妻だと言われても、すぐに納得はできないと思うもの。

「続きは応接室で話しましょう。車椅子を用意いたしました。アダン、応接室まで案内を。ルイも疲れているところ申し訳ないけど、もう少し話を聞かせてちょうだい」

旦那様の返事を待たずに移動を促す。

アダンやルイはともかく、ここには屋敷の使用人たちがいるのだ。

これ以上は使用人たちの前で話すべきではないと思つての提案だったが、旦那様も特に異論はないようで、おとなしく車椅子に座ってくれたのでほつとした。

応接室には旦那様とルイ、アダンはもちろんのこと、今後の旦那様のケアを相談するためメイド長のダーナにも同席してもらうことにした。

「それで、一体何があつたのですか？」

怪我人を長く拘束することもできないので、サクツと本題に入らせてもらう。

私の質問にはルイが答えてくれた。

「怪我の経緯としては、階段から落ちそうになつた方を助けようとして、共に階下に落ち負傷されたと聞いております」

「助けた方は無事だったのかしら」

「はい。旦那様のおかげで傷一つなく、ご無事とのことでした」

「そう、よかったわ」

一体何があつたのかと心配していたが、事故そのものはいたって単純なものだったらしい。それにしても、旦那様に庇われたという方から、三日たつても謝罪はおろかお礼すらも届いていないのはなぜ？ ルイも名前を言わないし、何かあるのかしら。

「そういうお仕事の方は大丈夫だったの？ 急ぎだと言つて出ていったでしょう」



「え？ あつ、はい！ そちらは問題なく終わっております。また、怪我をされているため、しばらくは休養するようにと第二王子殿下から言付かっております」

……怪しい。いま、明らかに動揺したわ。やはり、事故には何か裏がありそう。

でも、王族絡みだから明かせないと言われたらおしまいだし、いったん保留にしましょう。

「わかりました。ありがとうございます」

なんとなく釈然としないけど、まあいいわ。今一番大事なのはそのことじゃない。

お茶で喉を潤し、気持ちを落ち着かせてから本題・^{どうよう}入ることにした。

「旦那様。お怪我は大変でしたが、利き腕・^{うで}に問題がなくて幸いでした」

につこりと微笑みながら、用意してあった書類を取り出す。

本当にもう、三日も延びるなんて思いもしなかった。

これで両腕骨折と言われたら泣いてしまうところだったわ。

「……腕？」

「はい、じつは急ぎの書類があります。それに、どうしても旦那様のサインが必要でして。申し訳ありませんが、こちらにお名前を書いていただけますか？」

不審そうな顔をしながら書類を受け取った旦那様が、今日一番の驚きを見せた。

「なんだ、これは!？」

「離婚届ですわ」

「……は？ 一体どういうことだ！」

「奥様!？」

誰もが驚いた顔で私を見つめていた。

私は一人ひとりをゆっくり見渡し、もう一度微笑んだ。

「旦那様、離婚してくださいませ」

——やっと言えた。

苦節三年。いえ、プラス三日? とにかく、ようやく言ってやりました!

「待ってくれ! 離婚だなんてどういうことなんだ!？」

何も覚えていない旦那様にお伝えするのは少しだけ申し訳なく思う。

でもさすがに、いつその記憶が元に戻るかわからないのに、待つつもりはない。

「あら、大きなお声ですわねえ。こんなに近くにいますから、そのように声を張らずとも聞えますわよ?」

「っ、すまない。……その、ご令嬢。離婚とはどういうことなのだ? 我々の間ではそんな話が出ていたのか」

「一応はまだあなたの妻ですから、私のことはローズとお呼びください」

いくら記憶がなくても、三年も連れ添った夫に令嬢と呼ばれるのは気持ちが悪いわ。

「えっと、離婚の話はしていませんか? 本当は三日前の夜——三年目の結婚記念日に伝えるつもりだったのです。でも、急な仕事だといって慌てて出て行かれてしまって話せなかったのですわ。とにかく、私たちが結婚している意味はありません。そう思っ、私が準備いたしましたの」

丁寧に説明したのに、旦那様は動かないまま。

あら、駄目ね。書類だけではサインができないわ。気が急いでいるからってうっかりしていた。

「ささ、どうぞ! こちらのペンをお使いになつて?」

「お願いだから待ってくれ。——まず、この結婚はどうやって結ばれたものなんだ?」

勢いに負けてサインしてくれないかと期待していたが無理なようだ。仕方なくペンを置く。

「間違っても恋愛結婚ではないのでご安心を。ですが、政略結婚でもありません。ただのお詫びですから」

「お詫び?」

「はい、ですから何もお気になさらずサインなさつて?」

そつと書類を差し出してみるが、押し返される。

「そんなわけにいくか。だいたい離婚など私たちだけで決めていい問題ではない。婚姻は家同士の契約なんだぞ」

「あら、お義母様は大賛成だと思えますわ。ね、アダン。あなたもそう思うでしょう?」

うふふ、アダンの血の気が引いてしまった。そろそろお歳だからいじめたくはないのですが、致し方ありません。私の人生がかかっているもの。

「奥様、そのようなことは?」

「まあ、気を遣わなくていいのよ? だつておっしゃっていたではないの。どうして私のような女が大切な息子の妻なのか、と」

ちらりと旦那様を見ると、眉間をもみほぐしている。まさか嫁姑問題が勃発しているとは思わなかったみたい。

「……母が本当にそのようなことを言っていたなら申し訳ない。……だが、離婚は駄目だ。だいたいお詫びで結婚というところから意味がわからない。一体何から話し合えばいいのか……」

旦那様は両手で顔を覆い、うつむいてしまった。

それにしても、『本当に言っていたら』ってどういうこと？

確かにお義母様は旦那様には何も言わなかったから、気が付かなくても仕方ないのかもしれないけど。私が嘘を吐いているとでも言うのかしら。やっぱり記憶がなくても嫌な人ね。

あ、違うわね。記憶をなくした旦那様にとって、私は初めて会ったばかりの赤の他人なのだわ。信用できなくて当たり前かしら。

まあ、記憶があっても結果はたいして変わらない気もするけど。

もうっ、本当に面倒くさい！

腹は立つけど、ここで怒っても何にもならないことだけはわかるから。

「そうですね、記憶のない状態では判断が難しいでしょう。わかりました、私は席を外すわ。三人は、この五年間のことをしっかりと旦那様に説明してさしあげて。初対面の私から聞くより信用できるでしょう。私との話し合いは明日で結構よ。では、私は退席させていただきますわ」

また、旦那様の返事を待たずに『おやすみなさい』と告げ退室し、自室へと戻った。

ぼいっと靴を脱ぎ捨て、着替えもせずにベッドにダイブする。

はしたない？ そんなの知ったことか！ やつと終わらせることができると思ったのに！

また離婚できる日が延びてしまったことが悔しくて、ボスボスと枕に八つ当たりする。枕は少々よれよれになったが、何とか怒りは収まった。

しかし、まさか記憶喪失だなんて。本当に読めない人ね、旦那様は。

結婚してから——いえ、出会った当初から一度たりとも理解できたことのない人だった。

今さらその上をいくとは恐れ入る。

こんなことなら、あの日、無理矢理捕まえてでもサインしてもらえばよかった。

記憶があれば絶対に離婚してくれたはず。……いえ、不名誉だからとやはりもめたかしら？

本当に面倒だわ。彼の名誉など知ったことか。

それにしても。さっきの旦那様を思い出して思わず笑ってしまう。

だって、あんなにまっすぐに私の目を見て話す彼は久しぶりだったから。

……うん。久しぶりというより、初めて会った時以来なのではないかしら。

いつもは壁に話しかけているのかというくらいそっぽを向いていたし。

それに『お願いだから』ですって。お願いをしていたのは、いつも私だったわね。

その願いは、ま——ったく！ 聞いてもらえなかったけど!!

早く。……早く別れてしまいたい。自由になりたい。

私はもう、ここから出ていきたいのに……。だめ、泣きそう。

あとで叱られるだろうなと思いつながら、着替えもせずに、泣き出さないよう布団にもぐり込んだ。

——痛い。体の節々が痛くて目が覚めた。

どこだ、ここは……？ 屋敷ではない……？

なぜだろう。どうしてここで寝ているのか、まったく記憶にない。

なんとなく頭が重く、思考が定まらない。それでも状況を確認しようと、痛む体を起こしかけたその時、ガチャッとドアの開く音がした。

なるべく体をひねらないようにして、ゆっくりと音の鳴った方を見る。

「キリアン様！ お目覚めになったのですね!？」

「……ルイ……なのか？」

「よかった！ 全然目を覚まさないから本当に心配したんですよ！」

……なんだ？ 確かにルイだ。でも何かが違う。

その違和感がわからず、とりあえず今の状況を聞くことにした。

「ルイ、……何があつたんだ……」

「覚えておられないのですか？ キリアン様は、階段で足を踏み外した王女殿下を助けようとして、一緒に落ちてしまったんですよ！ 右足は骨折しているし、意識は戻らないし、本当に心配いたしました」

階段？ ……駄目だ。まったく覚えていない。それに、王女殿下？ ……まさか。

「……イヴォンヌ様はいつ帰国されたのだ」

「は？ イヴォンヌ様はずっと王宮にいらつしやるではありませんか」

「何を言っている。イヴォンヌ様はグランデ国に嫁いだだろう」

イヴォンヌ王女殿下。私の一つ年下の美しい姫君。

王族の証であるサファイアブルーの瞳に、月の光を束ねたような豊かに波打つプラチナブロンド。幼い頃からベルトランの宝石と言われ、国民にも愛されていた方だ。

十五歳の成人の儀で純白のドレスを纏った姿はあまりに美しく……大国グランデから祝賀のために我が国にやってきていたカミーユ殿下は、ひと目で彼女に恋に落ちた。

すぐさま熱烈な求婚がなされ、イヴォンヌ様は成人を迎えたばかりという若さで嫁がれたのだ。

「キリアン様こそ何を言っているのか……。イヴォンヌ様はカミーユ殿下と死別されて、三年前に帰ってこられたではないですか」

「……イヴォンヌ様がご成婚なされてまだ三年だ。それなのに夫であるカミーユ殿下が三年前に亡くなるはずがないだろう」

「は!? ちょっと待ってください。……キリアン様、最近のことで覚えていることは何ですか？」

「何を言って——」

「いいからお願いします！」

ルイの必死な姿に気圧され、とりあえず思いつくものを挙げていく。

「……学園を卒業してジョルジュ第二王子殿下の側近として仕えて半年だ。殿下が追っていたゲラン侯爵の汚職事件の証拠を揃え、逮捕に踏み切ったばかりだ」

あの時は本当に大変だったと話す私を見て、ルイが信じられないと言わんばかりに目を見開いた。「キリアン様、それは五年前の出来事です！　すぐ医者を呼んで参りますから！　あと、奥様にも連絡を！」

「いや、母上への連絡は待ってくれ」

「違います！　キリアン様の奥様ですよ！」

それだけ言うと、ルイはすごい勢いで飛び出していき、私は呆然と見送るしかなかった。

……五年前だと？　どういうことだ……

ゆっくり起き上がると、確かに右足には添え木が当てられ、包帯でぐるぐると固定されている。骨折したというのは間違いないようだ。階段から落ちたぐらいで情けない。

仕方なく、ベッド脇に置いてある松葉杖を使い、ゆっくりと鏡の前に立った。

そこに映る自分は、記憶の中の自分とは確かに少し違って見える。髪型も、顔つきも記憶にあるものから少し変わっている。

それから窓の近くに移動し、外の景色を見た。

ここは第二王子宮か。だが、見慣れた景色のはずなのに落ち着かない。……よく見てみれば、植えられている花の色が違うような気がするし、木の大きさや形もやはり違うと感じる。

——本当にここは五年後なのか？

ちよつと待て、さつきルイはなんと言っていた。奥様とは母上ではなく、私の……？

駄目だ。これ以上は頭が考えるのを拒否している気がする。

ほんの少し動いただけで疲れてしまい、おとなしくベッドに横になった。

——その後の診察の結果、医師に記憶喪失だと言われてしまった。

そして、……信じられないことに、私には妻がいる——らしい。

「……妻だと？　そんな……嘘だろう？　何も思い出せない……」

すでに情報過多で頭がおかしくなりそうだ。

これ以上、五年後のことを聞く気になれず、少し一人になりたいと言って全員出ていってももらった。逃げてどうにもならないことはわかっている。しかし、もう限界だった。

考えることに疲れ、ベッドに横になっていると、力強く扉をノックする音が響いた。

……少しでいいから一人になりたいと言ったのに。

それでも無視するわけにもいかず、仕方なく返事をする。

「はい」

「俺だ。入ってもいいか？」

聞き覚えのある声に驚く。この声は、まさかジョルジュ殿下なのか！？

慌てて起き上がると、まだ返事をしていないにもかかわらず殿下はさつさと部屋の中に入ってきてしまった。

「おいおい、大人しく寝ているよ」

……ああ、やはり雰囲気が違う。五年は大きいな。でも、こうして来てくださったということは、私は今も殿下の側近として仕事をこなせているのだろうか。

「わざわざお越しくださりありがとうございます」

殿下を前にして、ベッドから降りずにいるのはどうにも落ち着かない。

「本当に記憶がないのだな。最近のお前はもっと可愛げがないぞ。『大人しく寝ていられないのはあなたのせいです』とか言い返してくるところだ」

殿下は何でもないことのように笑っているが、本当にそんなことを言っているのか？

記憶がないので判断がつかず、とりあえず謝罪を口にする。

「……申し訳ありません」

「冗談だ。イヴォンヌのせいで本当に悪かったな。まだ何も思い出せないのか？」

「はい、残念ながら。イヴォンヌ様は大丈夫ですか？ お怪我はなかったと聞いていますが」

女性なのに傷跡が残りでもしたら大変なことだ。

「ああ、お前が怪我したからちよつと驚いて倒れただけだ。妹を助けてくれて本当にありがとう」
倒れた!? それは十分大事ではないか！

「もう少し上手く助けることができたらよかったです。私のせいで倒れたなどお詫びのしようもありません」

「お前は無駄に過保護だな。まずは自分のことを心配しなさい」

呆れたように言われてしまったが仕方がないではないか。

相手はこの国の王女で、殿下の妹君なのに。

「しばらくこちらに滞在してくれ。家の方にはそのように連絡しておこう。のんびり寝て起きたら記憶も戻っているかもしれない」

そんなことがあるだろうかと思いつつも、今すぐ屋敷に向かう気にもなれず、少しこちらに滞在させてもらうことにした。

「イヴォンヌも見舞いに来たがっていたが、最近のあいつの記憶もないのだろうか？ 今は疲れるだけだろうから断っておいたからな」

「ありがとうございます。まだ混乱しているので、お断りいただいて助かりました」

できれば、まだ人に会いたくない。五年後の話を聞きたくないのだ。

「おう、また落ち着いたら会ってやってくれ。いつまでも止めておくとうるさいから」

殿下は今後のことを少し話してから退室され、今度こそ一人になった。

殿下の訪問で一気に疲れてしまい、そのまま朝まで眠ってしまった。

翌朝、起きたら元通りに……なんていう奇跡は起きず、やはり今の私には十九歳までの記憶しかない。そして、怪我のせいなのか発熱してしまい、屋敷に戻ったのは記憶を失ってから三日後のことだった。

とうとう、帰ってきてしまった……

あれから結局、ほとんど今の自分の話は聞いていない。臆病者と笑ってくれていい。

ルイも私が情報を拒否していることに気づいているのか、こちらからの質問に対する返事以外は何も話そうとはしなかった。

しかし、これ以上逃げるわけにはいかない。

深呼吸してから馬車を降り、まだ使い慣れていない杖を使いながら玄関に向かう。

「おかえりなさいませ、旦那様」

見知らぬ、美しい女性が出迎えてくれた。

鮮やかな薔薇のような赤髪に猫のように煌めくグリーンアイズ。少し小柄だが、魅力的な肢体。

この女性がまさか……？

「……あなたが私の妻なのか？ まさか本当に結婚しているなんて……」

「は？」

どうやら女性は私が記憶喪失になったことを知らなかったらしい。

しかし驚いたのも一瞬だけ。淡々と事実確認をしていき、最後は美しいカーテシーでの自己紹介で締めくくった。私は呆然としてしまい、気がつけば車椅子で応接室まで移動していた。

ローズ・ルロワ子爵令嬢。

……ローズ。彼女にぴったりの名だ。大輪の薔薇がよく似合う。

しかし、子爵家とは意外だった。我がシユバリエ公爵家は王家とも縁が深く、古くから続く名門だ。私自身、幼い頃から第二王子殿下のご学友を務め、今では側近として仕えている。

それなのにだ。確かに美しくはある。だが、ルロワ子爵は私の記憶にある限り、特に利があるよ

うな家門ではない。中立の、力も財力も持たない下位の貴族のはず。

……まさか、恋愛結婚なのか？ 疑問だらけのまま彼女と向き合う。

しかし、話し合いは予想外の方向に進んだ。彼女は結婚詐欺師なのかと疑いたくなるほど、流れるように誘導して離婚届にサインをさせようとする。

お願いだ、誰か助けてくれ！ と泣きつきたいくらいだ。

そんな心の声が聞こえたのか、ローズ嬢はあっさりと説明をアダンたちに任せ退室してしまった。

「今のは何だったのだ？ ……すまん、本当に何もわからないんだ。この五年間に何があったのか話してくれないか」

私の質問に対し、最初に発言したのはルイだった。

「キリアン様、こちらに戻るまでに何もお話しせず申し訳ありません」

「いや、私が知るのを怖がっていたせいだろう。だが、もう腹をくくったよ。教えてくれるかい？」私の言葉を聞き、ルイが居住まいを正した。

どうやら、簡単に済ませられる話ではないようだ。私も思わず背筋を伸ばす。

「……はじまりはキリアン様の最後の記憶にあった、ゲラン侯爵の逮捕です」
なんだと？ どういうことだ。

ルロワ子爵家とゲラン侯爵は派閥も違うし、捜査上は名前など挙がっていなかったのに。

私の疑問に気が付いたのか、ルイが痛ましそうに眉をしかめる。

「侯爵の逮捕によって不利益を負った男が、キリアン様を逆恨みして事件を起こしました。それに

巻き込まれたのが、当時まだ十六歳だった奥様です」

……確かに、彼一人を捕まえて終わりではなかっただろう。

しかし、まさか無関係の女性が巻き込まれてしまったとは。

「奥様は重傷を負い、キリアン様は責任を感じ求婚されました。奥様は、最初は求婚を拒否していたと聞いています。ですが、第二王子殿下からのお言葉もあり、奥様の卒業を待つてからの結婚となりました。奥様がお詫びと言っていたのはそのためです」

重傷ということは、たぶん、傷跡が残るほどのものだったのだろう。それはどれほどの恐怖と苦しみだったのか。想像しただけで胸が痛む。

「大変な目に遭わせてしまったのだな。……まさか、彼女に婚約者でもいたのか？」

「いえ、婚約者も恋人もいらっしやいませんでした。さすがに、恋人を押しつけてまで求婚はしませんよ」

では、なぜ離婚したいのだろう。

今でも私を恨んでいるのか、王子命令での結婚が嫌だったのか。

「母上との関係はどうだったんだ？ そんなにもひどい扱いをしていたのだろうか」

だが、母には公爵夫人としての矜持^{きようじ}がある。そんな愚かな行動はしないと思うのだ。

「大奥様は残念ながら結婚に反対されていました」

「……やはり子爵家だからか？」

「そうです。何の旨味もない下位の令嬢。事件に巻き込まただけで、キリアン様が直接傷をつけ

たわけでもないのだから、結婚までする必要はないだろうというお考えでした。あともう一つは王女殿下が帰国なさったことです」

「なぜそこでイヴォンヌ様が出てくるんだ」

そういうえばキミアン殿下と死別なさって、帰国されているとは聞いていた。

だが、そんなこと私とは関係ないだろうに。

「初婚ではありませんが身分は王女です。それも離縁ではなく死別ですから、王女殿下に問題があったわけでもない。大奥様にとっては、キリアン様の妻として大変望ましい存在だったのです。……それに、キリアン様が婚約してから三ヶ月後だったんですよ、王女殿下が戻ってこられたのが。だから大奥様は、余計に諦めきれなかったのでしょうか」

なるほど。母がそう考えるのはわかる。

王家としてもシユバリエ公爵家ならば降嫁先としてふさわしいと考えるだろう。

だが、それは彼女のせいではないし、そんなことで八つ当たりされては困るだろうに。

「ただの婚約なら解消することも可能でしたが、事件のことは世間にも知られていて、キリアン様の婚約は美談として扱われました。傷を負った子爵令嬢にまさかの公爵家嫡男がプロポーズ！ と一時期すごい話題で、それを今更王女と結婚したいから婚約解消するなんて無理だったのです」

「……事件の悪い印象を、美しい結婚話で払拭^{ふしつ}しようとしたのか」

あの時の捜査は相手が大物だったせいで、殿下も多少強引な手を使ったところがあった。

侯爵家の汚職に続き、王家の強引な捜査のせいで何の関係もない令嬢が被害にあったდანანდე、

王家への印象が悪くなる恐れがある。

王家が揺らげば国が乱れる。殿下は国を護るためなら、結婚くらい簡単に命令するだろう。

「大奥様には、その辺りのことはお話ししていません。あくまでキリアン様が罪の意識で責任をとるために求婚したのだと思っておられます」

まさかそんなタイミングでイヴォンヌ様が戻ってこれれるとは殿下も思わなかっただろう。こればかりはどうしようもない。

だいたい降嫁の打診があつたわけでもあるまいし、母には困つたものだ。

「それで結婚して三年経つても許さず、彼女を責めているのか？」

「……いえ、あの、……お二人にはまだお子がいらつしやいません」

「ああ、そういうことか。だが、まだ三年だろう。そこまで焦らなくても問題ないのでは？」

それに、なかなか子を授かれていない状況だとしても、彼女のせいではなく私の方に問題があるかもしれないのだ。

「……大奥様は、キリアン様の前ではそういった話はなさいませんでした」

まさか、本当に世間でよく聞く嫁いびりを母上がしていたのか。まったく気づかないとは私も間抜けだな。彼女も一人責められてつらかつただろうに。

「よくわかつた、ありがとう。明日、彼女と話してみよう。記憶を持たない私の謝罪を受け入れてくれるかはわからないが、このまま離婚するわけにはいかないから。母上とも話をしないと」

彼女に心からの謝罪と、これからは一人で悩まずなんでも打ち明けてほしいことを伝えなくて

は。……だが、なぜ、そんなこともせずにいたのだろう。五年後の自分に呆れるばかりだ。

明日のことを考えていると、ふと視線を感じ、顔を上げる。

それはメイド長のダーナからだつた。

「どうした？ 他にも何か心配事があるなら言ってくれ。今は少しでも情報がほしいんだ」

「……いえ。あとは奥様としつかりお話された方がいいと思います。ローズ様はいい方ですよ。シユバリエ家に馴染もうと大変努力されて、いまでは私たち自慢の奥様です。もともと賢い方なのでしよう。努力家で、私たち使用人にも優しい素敵な女性です。どうか手放しませんように」

ダーナの言葉は本心なのだろう。公爵家に忠実な彼女がここまでいうのだ。

本当に、ローズ嬢の人となりを認めているのだろう。

「わかつた、ありがとう。彼女とわかり合えるよう努力するよ」

話し合いはそこで終了となり、一階に用意してくれた部屋に向かつた。愛用品をすべて移してくれているようだ。その、細やかな配慮は彼女の指示だろうか。

ベッドに横になり目をつぶる。なぜか彼女の鮮やかな赤が眼裏に浮かん（まぶら）だ。

「……ローズ……シユバリエ、か」

まだ、馴染むことのない妻の名前。明日、彼女とうまく話せるだろうか。少し頭痛がする。長く話して疲れが出たようだ。

自分の知らない自分のことを聞くのは精神的にきつい。

だが、まさか母がイヴォンヌ様との結婚を望んでいるとは思わなかった。

子どもの頃から殿下の遊び相手として王城にも行っていた。たまにイヴォンヌ様も一緒に遊んだりしたので妹のような感覚だった。

可愛らしい姫君だったが、十五歳の美しくもまだ少し幼さが残る姿しか知らない。だが、イヴォンヌ様も今はもう二十三歳か。きっと美しくおなりだろう……

そんなことを考えているうちに、重くなるまぶたに抗えず眠ってしまった。

翌日、昨日の続きを話し合うため、今度はローズ嬢と二人きりで向かい合っている。

「おはようございます、旦那様。昨日はゆっくり休めましたか？」

旦那様と呼ばれるのにまだ慣れない。

だが、顔には出さないように気を付けながら返事をする。

「おはよう、ローズ嬢。やはり自分の家は落ち着くな。久しぶりにゆっくりできたよ」

「そうですか、よかったです。でも、普段からよく第二王子宮に泊まっていらいしました、記憶がないとそういう感覚も無くなってしまふのですね」

「……そうなのか？」

「ええ、側近とはやはり大変なお仕事なのだと思いますわ」

確かにジョルジュ殿下は大変行動的で、思い立ったら即実行していくお方だ。頭脳明晰で勘も鋭く、どんな思考が先に進んでいくのに着いていくのが大変だった。

彼の側近は大変やりがいはあるが、決して楽な仕事ではないだろう。

「そうだな、殿下は本当に尊敬できる方だが、あのなんでも即実行！ というのがな。誰もが殿下ほど理解力があると思わないでほしいよ」

「……」

「どうした？」

ローズ嬢が驚いたような顔でじっと見つめてくる。

なんだ？ 変なことを言っただろうか。

「……いえ、旦那様が私に仕事の話をするのも珍しいのに、まさか軽口を叩いて笑ってらっしゃるから驚いてしまつて」

「いや、この程度は仕事の話とも言えないし、私だって笑うくらいはするだろう？」

確かに私は社交的とは言えないが、そこまで寡黙な質でもない。そう思っていたのだが、彼女の表情を見るとどうやら違うらしい。笑みが深くなったのに、その瞳は冷やかだ。

「まったくしなかったですね。だいたい会話といっても私が話しかけるだけ。たまに『ああ』とか、『そうか』と返事があるくらい？ 視線が合うことすらまれで、三秒以上私と目が合うと石にでもなるのかしら？ とつねづね思っておりましたわ」

「は？」

何だ、それは？ 一体、誰の話をしているんだ！ それに、昨日は誰もそんなことを言っていない。まったく。もしかして、問題があるのは母上ではなく私なのか？

「あら、その様子ですと、昨日は誰もそんな話はしなかったみたいですね」

どうしてわかったんだ？

心を読まれているようで怖い。猫のような瞳がじつと私の心を覗いているような気がしてくる。

「……それは本当に私のことか？」

「ふふっ、まさか知らない方の話をするわけがないでしょう？」

いや、確かにその通りなのだが。しかし、まったく理解できない。確かに女性の喜ぶような話題が豊富なわけではないが、日常会話程度はできるつもりなのに。

「でもそうですね、初めてお会いした頃は違いました。まあ、私は怪我人でしたし、優しく声をかけてくださいましたよ？ 見舞いとして来て早々、まさかのプロポーズでしたが。それも、責任をとるというまったく嬉しくないものでしたね」

やはり、求婚自体も気に入らなかったのか。だが、責任を取るのとはなぜ駄目なのだろう。令嬢の体に大きな傷があれば、結婚だって難しくなるはずなのに。

「私はきっぱりお断りして、怪我を理由に会わないでいたのです。でも、今度はジョルジュ殿下が直々にお見舞いに来られてしまつて。ああ、これはお断りできないやつだ！ と諦めました」

「……そんなに嫌だったのか」

少しショックだ。それでも、それなりに人気があるつもりだったのに。

「だって、子爵家から公爵家に嫁ぐのですよ？ ありえないほどの階段飛ばしですもの。普通に怖いです」

「……そうか」

では、公爵家という敷居しきいの高さが問題だけで、私自身に不満があったわけでは……

「まあ、腹をくくりましたけど。私が起きあがれるようになってすぐに婚約を結んで……それから、月に一度お茶会で会うくらいでした。最初は、旦那様の口数は多くなかったけど、普通に私の目を見てお話ししてくださいました。でもだんだん相槌あいつだけになり、目も合わなくなつて。その空間に幽霊でもいるの？ というくらい、旦那様は空気をご覧になっていましたね。もしかして靈感でもあります？」

ない、絶対にありえない。靈感もないから幽霊など見えないし、そんな失礼な男でもないはずなのに！ まさか、求婚を断られたから？ いや、それなら最初の茶会から不機嫌なはず。それに、そんな心の狭い人間だとも思いたくない。

なぜなのだ、五年後の私！ さっぱり理解できないぞ！

「……その、まさかその状態が結婚するまで続いたのか？」

「いえ」

よかった、違うのか……。思わず小さく拳こぶしを握っていた。

「卒業する頃にはお茶会も無くなりましたね。最初は会えないことに対するお詫びが書かれた自筆のメッセージカードとお花が届きました。そのうちカードのみになり、しまいには式の準備に忙しいだろうから、お茶会は今後中止しようと連絡がきました」

つらい、心が折れそうだ……

責任をとって結婚するだけだとも言いたいのか？ 釣った魚に餌えさはやらない系だったのか？

お願いだから記憶よ、戻ってくれ！ 未来の私が別人過ぎて、関係修復は無理だ！

「続きをお話してもいいかしら？ それですわね、やっと結婚式の日にお会いできましたの。旦那様はとっても素敵でしたよ？ 誓いのキスは口の横に触れるか触れないか程度でしたけど。そして初夜です。ドキドキして待っていた私に、珍しくまっすぐ視線を向けられて、『お前を抱くの無理だ』とおっしゃいました」

なんだ、その度し難い男は！ ……あ、私のことなのか。

「その発言には本当に驚きましたわ。なぜですかと聞いても無言で、言いたいことだけ言つて部屋を出ようとなさるものですから、思わず『旦那様は不能ですか！』と叫んだら凄い目で睨みつけられましたね。あれはちよつと怖かったです」

「……」

「あら？ 旦那様、聞いてます？」

「……まさか、自分がそんな酷い人間になっているなんて。そんなこと言う奴は小説の中だけだと思つていたのに……」

「まあ奇遇きぐうですね！ 私も後で冷静に考えた時に同じことを思いましたわ」

ローズ嬢は、旦那様でも恋愛小説をお読みになるのですねと、くすくす笑った。

「……なぜ笑えるんだ？」

初夜にそんな扱いを受けて、どうして――

『なぜ』ですつて？ あなたが口になさるなんて業腹しゅうはらですわ」

キツと睨みつけられた。そうしていると本当に猫みたいだ。

「……だつてもう笑うしかないでしょう？ どこまで私を馬鹿にするつもりなのかと思うじゃないですか。私は結婚したくないと言つたのです。それを殿下の権力という圧力に負けて、嫌々応じただけなのに！」

よかった。いや、よくはないがちゃんと怒ってくれた。

正直に気持ちを見せてくれないと、私には彼女の気持ちを理解することなんてできないから。

「それでも私は婚姻時代からかなり我慢していたのです。お茶会でまったく目が合わない時は、『きつと私が美しすぎて直視できないんだわ！』とか。話しかけても無視された時は、『好きな子にはついつい素直になれず意地悪しちゃうお子様なのね！』とか。……そうやって、いろいろな妄想をかき立てて、あなたの冷たい態度をしのいできたのですよ？」

それは何ともたくましい……いや、涙ぐましい努力だ。

「おかげ様で公爵家に嫁ぐためにたくさんのお話を学ばなくてはいけない大事な時期に、妄想の材料探しのための恋愛小説を読みふけていたのがお母様にバレて、すぐく叱られましたわ」

なんというか、表情がころころ変わって面白い。

だが、こんなにも頑張ってくれていたのに、私は彼女の何がそこまで気に入らなかったのか。

「でも、さすがにあの言葉だけは、どう頑張つても妄想でどうにかなるものではありませんでした。……抱けないってどうなの。まるで私がお願したけど振られたみたいじゃない！ 別に抱いてほしいと思つていたわけじゃないわよ！ 痛いのは怖いし！ もう何？ やっぱり不能？ それ

ともジョルジュ殿下に叶わぬ恋でもしているのかしら!？」

「いや、すっかり妄想しているじゃないか」

「よりにもよって殿下なのか！」

「だって！ 抱けないって、無理ってなんなのよ！ ……もうね、悲しいんじゃない、悔しくて泣きそうだったわ」

彼女の目に涙が浮かんた。三年たった今でも、こうして思い出すだけで泣きたくなるほど傷つけたことに、記憶はなくとも罪悪感が募る。

「でも、そんな酷いことを平気で言うあなたなんかのために泣きたくない。絶対に泣いてやるものか！ って、心に誓ったんです。だからね、私はどんなにつらいときでも笑ってやるって決めたのよ」

そう言って、ローズ嬢は潤んだ瞳を隠すことなく、私を見つめたまま微笑んだ。

その姿は、今まで見た誰よりも美しかった。

「……君は、強いな」

「それ、褒めているんですか？」

「もちろん」

「旦那様は、顔はいいけど褒め言葉はお粗末なですね。でもまあ、ちよつとだけいい気分です」ふふん、と得意気に笑ってみせる顔は少し幼い。だが、そんな表情も好ましく思う。

これまで話をしていて、彼女への悪感情はまったくくない。

それなのに、なぜ未来の私はそこまで酷い振る舞いをしてきたのだろう。

「……君が離婚したい気持ちがあったよ。未来の私は酷い男だな」

「えっ？ まだ全然終わじゃないですよ？ まだまだあります。続けてもいいですか？」

これ以上酷いのか!? まさか、その後の三年間もずっとその調子だったと？

無理だ。逃げないと誓いはしたが、これ以上は頭の整理が追いつかない。

「……すまない。少し休憩しないか……」

よほど情けない顔をしていたのだろう。

ローズ嬢は呆れながらも、休憩にすると言ってくれた。

「仕方がないですね。お茶でも淹れましょうか。……あなたは飲んでくれますか？」

「もちろん——て、まさか私はお茶も断っていたのか」

「そうですね。忙しいとか、忙しいとか、忙しいとか？ 殿下の側近様は大変ご多忙のようでした」

ああ、もう！ 何を言っても地雷ばかりじゃないか！

「本当にすまない！ でも、少しでもいいから休憩したいし、君のお茶が飲みたいんだ！」

もうなりふり構わず頭を下げた。

なにより、たとえ彼女を覚えていない私だとしても、そのお茶を飲んであげたいと思ってしまう。こんな当たり前の日常すら否定され続けた彼女が、あまりにも悲しかった。

「まあ、本当に別人みたいですわ。あなたといてこんなに楽しいのは初めてだわ。よし、後で記憶

が戻ったら泣いて悔しがるくらい美味しいお茶をご用意しますね！」

そう言って、嬉しそうにお茶の準備を始める姿を見ながら、何とも言えない気持ちになる。

——記憶が戻ったら、か。そうしたら今の自分はどうなるのだろう。

ローズ嬢が知っている酷薄な私と違って、彼女のことを美しいと、好ましいと思い始めている私の想いはどこにいくんだ？

彼女が離婚を望んでいるのは未来の私だ。

だったら今、すべてを忘れた私なら、このまま一緒にいてくれるのだろうか。

私は、そんなことを考えながらお茶の準備をするローズ嬢を見つめていた。



楽しいわ！あの腹の立つ旦那様を謝らせるなんて！

お茶の準備をしながら、心が浮き立つのを感じる。

でも残念ながら記憶がないのよね。申し訳なさそうにしているけど、彼は自分のやってきたことをただ知っただけ。そんなことをしていた実感が何もないから、どこか他人事なのよ。

私の前であたふたしている姿を見たのは初めてだったから、つい楽しんじやっただけ。私はあのどうしようもなく腹の立つ、記憶を失う前の旦那様を泣かせたい。

でもどうやってたら記憶って戻るかしら。

「もう一度、頭に強い衝撃を与えたら戻るとか？」

「……おい、怖い考えが口から漏れているぞ」

じとりと半眼になった旦那様が面白くて、つい意地悪をしたくなる。

「あら、ごめんなさい。でも記憶がない旦那様に文句を言ってもなんだか違うと思ひまして。実行犯をあぶり出すにはどうしたらいいのでしょうか」

「私に優しさを見せてくれるのは嬉しいが、頭への衝撃はやめてほしい。今以上に記憶を失ったらどうするんだ。中身が子どもに戻った夫など困るだろう」

「そうですね。でもそうしたらすぐに離婚届にサインしてもらえるのでは？あ、もしかしてもうサインする気になりましたか？こちらに準備してありますよ！」

「待て！」

こんなふうに旦那様と言いが合えられる日はくるとは思わなかったけど、期間限定なのよ。馴れ合わないように気をつけないと。

「そうだ。以前までの旦那様と区別を付けるために呼び方を変えますか？……記憶喪失の旦那様、それとも旦那様未満のお方？んゝ、呼びにくいわね」

「君の思考は時々本当におかしいな。だったら普通に名前で呼べばいいだろう」

「——キリアン様？」

懐かしい。婚約時代はこう呼んでいたことを思い出した。だが。

「ちよっと。言われたとおりに名前前で呼んだのに、どうして顔を背けるんですか？」

「違う！ なんだか、……うん。……少し、照れくさかったんだ」

誰よ、この男は。頬を染め、乙女のように恥じらう姿はちよつと気持ち悪い。

「……思春期ですか？」

なぜ照れるの？ 私のことをおかしいと言ったけど、キリアン様の方がかなりおかしいと思う。でも、不機嫌になったわけではないから気にしないでいいかしら。

「そういえば。キリアン様、今後のご予定は？ お仕事にはいつ頃から復帰なさるのですか？ 離婚届が気になり過ぎて聞くのを忘れていました」

「ああ、しばらく休んでいいとは言われているが、足の方は固定しているからさほど痛みはない。

ゆつくり移動したら大丈夫そうだから、明日には一度顔を出そうと思っている。いつもの環境にいた方が記憶も戻るかもしれないし」

そうね、今のままでは不便でしょうし、早く元に戻りたい気持ちは理解できる。

「そうですか。ではさつさと続きを話して——いかに離婚することが正しいのかをご理解いただき、今日中に手続きを進めましょうか」

先ほどの様子を見れば、私たちの結婚生活がとうに破綻はたんしていることに気づいただろう。

だから、あと少しで離婚を受け入れてくれる。そう思ったのに。

「……すまない。申し訳ないが、その件はしばらく待つてほしい」

キリアン様から、保留の提案が出されてしまった。

「逃げるわけではないんだ。だが、私たちの結婚は殿下の口添えがあつたのだろう。それを私たち

二人だけで離婚すると決めるわけにはいかないよ」

……は？ この人は今まで何を聞いていたの？

「それにお互いの家族にも承諾を得るべきことだ。だからもう少し時間がほしい。それに。——私たちはもう一度やり直すことはできないのか？」

いま、この男は何と言った？ やり直すって、なにを？

「……何を言っているのですか？」

「勝手なことを言っているのはわかっている！ だが、記憶を無くした私は、君をとて素敵な女性だと感じているし、こんなわけもわからないまま手放したくないんだ！ どうかチャンスを与えないか？ 君が嫌だと思つたことは改善する。もつと話し合いましょう。お互いにしっかりと向き合つて、それでもどうしても無理なら離婚を進めよう。それでは駄目か？」

彼の真剣な眼差しから、本気で言っていることだけは伝わってきた。

……そうね、だってあなたは覚えていないから。まるで他人のように酷い男だとなじり、自分なら私を救えると思つているのかもしれない。

……でも、あなたたちは同一人物なのに。

「……いつまで？ いつまで待てばいいの。私はずっと待つていたわ。三年たてば自由になれる。それだけを希望に頑張つてきたのに、まだ待たないといけないの？ どうして？」

「あ……でも、どうして三年なんだ？」

「——本当に、わからないのですか？」

酷くむなしき気持ちになる。それでも、自分の未来のためにあと少し頑張らなくてはと思い直したその時、応接室の扉がノックされた。

「……はい。どうしたの？」

人払いをお願いしていたのに、何かあったのだろうか。

「失礼いたします。キリアン様にお客様がお見えです」

来客を告げるアダンの、緊張した様子が気にかかった。

「……来客予定はなかったわよね？ 連絡もなしにいきなり来られたのかしら」

「はい。連絡はございませんでした。ですが、……イヴォンヌ王女殿下がお越しになりました」
彼は、そう静かに告げたのだった。

◆

イヴォンヌ様が？ もしかして私の怪我を心配してわざわざ来てくださったのだろうか。

結局、一度も会わないまま帰宅してしまったことを思い出した。

「……そう。では応接室にお通して。キリアン様は車椅子へどうぞ。私も一緒にご挨拶に伺いますわ」

アダンがイヴォンヌ様の来訪を告げた途端、ローズ嬢は表情を硬くした。

どうしたんだ？ 先ほどの話が尾を引いているのだろうか。

いや、王女殿下が来たと聞いて緊張しているのか？

「たぶんお見舞いに来られたんだよ。実は、私が階段で助けたのはイヴォンヌ様なんだ。その後は記憶喪失の件でそれどころじゃなくて、お見舞いをお断りしたまま帰ってしまったから心配なさったのだろう。申し訳ないことをしてしまった」

なぜか言い訳をしている気分になりながら、ことの経緯を説明する。

「そうだったのですね。イヴォンヌ様がお相手でしたの。……それならば命懸けにもなりますわね。でも、イヴォンヌ様もキリアン様に会うのを断られるとは思いませんでしたから、さぞ驚かれたことでしょう」

「そうなのか？ まあ王女殿下に逆らうことはないとは思いますが」

なんだろう。何か違う意味が含まれているような言い方じゃないか。

……まさかイヴォンヌ様に嫉妬しとしているとか？

もしそうなら、まだやり直すチャンスがあるかもしれない。

「キリアン様は、イヴォンヌ様とまだ会っていないかったのね。……そう、だからなの」

だが、ぽつりとつぶやく顔に嫉妬は見えず、まるで何かを悟ったかのような表情が気にかかる。

「どうした？」

「いえ、すぐにわかることですから大丈夫です」

なぜだろう。さっきまで少し打ち解けてくれているように感じていたのに、急にまた壁ができてしまった気がする。やはりもっと話し合いをしないといけないということなのか。

それからは互いに無言になり、なんとなく居心地が悪い。
応接室にたどり着き、軽くノックをして到着したことを伝える。

すると、扉が勢いよく開いた。

「キリアン！」

呼ばれるより早く、一人の女性がこちらへ駆け寄ってくる。

次の瞬間、その体が胸に飛び込んだ。

抱きついてきた体を支えるため、とつさに腕を回す。

勢いそのままに飛び込んだのは、温かく、華奢さしやな一人の女性だった。指先に触れた感触は驚くほど柔らかい。支える腕に、思わず力が入る。

そして、距離が一気に詰まり、鈴蘭すずらんの香りが鼻先をかすめた。

——ああ。……この香りを、私は知っている。

「……イヴ？」

「キリアン！ 思い出したの!? よかった！」

はじけるような笑顔が目には焼き付いた。

一瞬、反応が遅れた私にかまうことなく、彼女はさらに縋すがりついてきた。反射的に、強く抱え直したその瞬間。思考より先に胸の奥が甘く反応した。

——イヴだ。

そう確信するような、理由のない感覚。

「イヴォンヌ様、お待たせしてしまい申し訳ありません。まずは座ってお話をしましょうか」

落ち着いた声が室内に響いた瞬間、まるで熱に浮かされていたように浮ついていた意識が現実へと引き戻された。

慌てて声の方へ視線を向ける。少し離れた場所に、ローズ嬢が立っていた。

背筋を正し、静かにこちらを見ている。その視線に気づいた瞬間、胸の奥が冷えた。

——私は今、何をしてしまったんだ？

「……ローズ嬢、私は」

言いかけたところで、イヴォンヌ様が身を離し、まるで何もなかったかのように明るい声を上げた。

「ローズ、ごめんなさい！ キリアンの怪我がどうしても心配で来てしまったの。連絡しないで来るのはマナー違反だとわかっていたんだけど……許してくれる？」

そう言つて、イヴォンヌ様はまるで甘えるようにローズ嬢を見つめ、懇願こんがんした。

「イヴォンヌ様を咎める者などいませんよ。さあ、中でお話しましょう。美味しいお菓子もありますのよ」

「嬉しい！ ローズが選ぶものは間違いないもの！」

「まあ、光栄ですわ」

……どうして？ なぜ、こんなにも自然に会話が成立しているのだ。

まるで、自分だけが取り残されているようだった。

「キリアン、大丈夫？ 怪我はもう痛くない？ 私のせいで本当にごめんなさい」

「あ、いえ、とんでもありません。私こそ情けない姿をお見せしてしまい申し訳ありませんでした」慌てて答えると、イヴォンヌ様はほっとしたように微笑んだ。

「まあ、何を言っているの？ あの時のあなたは勇敢な騎士様ゆうかんのようだったわ」

その言葉に、再び胸の奥が甘く熱を持つ。そして、彼女を守らなければならないという衝動。

——まだだ。先ほどから、知らない感情が勝手に湧き上がる。

「では、私はこれで失礼しますわ。お二人でゆっくりお話なさって？」

「ローズ嬢？ そんな、君も一緒にいればいいだろう」

思わず口に出す。イヴォンヌ様と二人きりにされることに、妙な不安があった。

「本気ですか？ ……記憶が戻ったのではなかったの？」

いぶかしげな言葉と共に、ローズ嬢の視線がゆっくりと下がった。

気づけば、私はまだイヴォンヌ様に手を添えたままだったのだ。

「キリアン、まだ思い出せないの？ それでも私のことはわかったのね？ だって『イヴ』って呼んでくれたわ！」

「そのようですね。やはりイヴォンヌ様は旦那様の特別なんでしょう」

ローズ嬢のその一言が、強く胸に引っかかった。

違う、と言いたいのにな、なぜか言葉が出てこない。

「……すまない。なんだか頭がおかしいのだ。まるで、自分のものじゃない感情があるみたい

な……」

こめかみに鈍い痛みが走り、思わず顔を歪める。

「キリアン、大丈夫？」

優しい声音と共に、ひんやりとした指先が額に触れた。

——イヴォンヌ様だ。

私はその手を、考えるよりも先に、すぐるように握ってしまった。

「……あ」

「いいのよ、キリアン。少し落ち着いた？」

握ったままの手を離せない。離すべきだとわかっているのに、体が言うことを聞かない。

その時、扉が乱暴に開かれた。

「イヴォンヌ！ 勝手に出ていくなと言っただろう！」

鋭い声と共に現れたのはジョルジュ殿下だった。

「お兄様、もう迎えに来てしまったの？」

イヴォンヌ様は悪びれもせず首を傾げた。

「キリアンはまだ療養中だ。勝手な行動は控えろと言っただけだ」

「だって、お兄様が意地悪するからいけないのよ。私は会いたかっただけだもの」

「それでも無断訪問は問題だ」

二人のやり取りに、室内の空気が一気に変わる。そこへ、ローズ嬢が一步前に出た。

立ち読みサンプルはここまで

「ごきげんよう、ジョルジュ殿下。ですが、無断訪問という点では殿下も同じなのではありませんか？」

いっそ冷やかなほどの指摘に、殿下が立ち止まる。そろりと視線をローズ嬢に向けて。

「……ああ。確かにそうだな。悪かった」

あの殿下が、あっさりと謝罪した!? ……一体なぜ。

暴れ馬と名高いジョルジュ殿下の殊勝な態度に、驚きのあまり思わず見入ってしまう。

その時、殿下の視線がおもむろに私の手元へと向けられた。私は、未だにイヴォンヌ様の手を握ったままだったのだ。私は慌てて手を放したが、今更だろう。殿下からの叱責を覚悟する。

しかし、殿下はなにも言わず……ローズ嬢もまた、その視線に気づかなかったのか、殿下の側に控えていた男に声をかけた。

「アラン様も殿下に引つ張つて来られたのですか。大変ですわね」

「これでも殿下の護衛なんだけどね。突然来て悪かったよ。僕ではこの人を止めるのは無理だった」

殿下に対して軽口をたたいている護衛のアランは、私と同じで子どもの頃から殿下の友人という立場にいる人物だ。だが、ローズ嬢は彼とも懇意にしているようだ。ずいぶん気安く話している。

「キリアンも悪かったな。イヴォンヌが勝手に外出しててこちらも驚いたよ」

「……いえ、とんでもございません」

殿下は先ほどのことには触れず、ただ、イヴォンヌ様の突然の来訪についてのみ言及された。

……なぜローズ嬢と殿下たちが親しげなのか。

……なぜ殿下は、自分とイヴォンヌ様との関係を問いたささないのか。

わからないことだらけだが、そんなことを尋ねられるはずもなく、今の自分は引きつった笑みを浮かべているだろうなと思いつつも言葉も返す。

だが――

「――どうした、キリアン。記憶が戻ったか？」

それまでの楽しい表情が消え、殿下は一気に確信へと切り込まれたのだ。

「そうなの、聞いてお兄様！ キリアンはね、私のことだけ思い出したのよ！ イヴって呼んでくれたわ！」

イヴォンヌ様が、嬉しそうに先ほどの私の失態を殿下に報告した。

「申し訳ありません！ そのように馴れ馴れしい真似を。なぜか口について出てしまい……」

血の気が引く思いだったが、こうなつては謝ることしかできず、謝罪の言葉を口にする。

「なぜか、は思い出せないのか」

今度こそ叱責を覚悟した。

――しかし、殿下は驚くことなく、ただ、記憶の確認をしてきただけだった。

その事実にも愕然とする。なぜなら、そこから導き出されることは一つしかないからだ。

……未来の私は、妻がいる身でありながら、イヴォンヌ様を愛称で呼ぶことを許されていたのだ。そして、彼女の香水の香りを覚えるほど、近くにいることすらも。